一対の魔王

ウィナ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

一人の少女はその才により姉と疎遠になっていた
一人の少女はその才により恐れられ、孤独であった
二人の少女は一つの卓で出会い、共通の目的の為に手を取った。

という半分あってるあらすじですが、
基本的には魔王な咲さんが龍門渕高校に入学して、衣ちゃんと一緒にその他大勢をなぎ倒していくだけの作品になる予定です。

他の咲ＳＳに影響を受けている部分があるのでご了承ください（逃げ口上）
２／１８　突っ込まれたのでタイトル修正。ご指摘ありがとうございます

目次

番外
幕間の物語　―青い天と白い聖夜―　1
宮永咲、中学3年生編
プロローグ　7
1話　邂逅　11
2話　交流　27
3話　友達　36
4話　白糸　46
5話　譲渡　56
6話　治水　64
7話　格差　74
8話　試練　83
騒乱の始まり、長野編
9話　始点　91
10話　清澄　97
11話　選定　105

番外
幕間の物語　―青い天と白い聖夜―

１２月２５日
世間一般でいうクリスマスである。
仲の良い友達同士でパーティーをしたり、
恋人がいる者は恋人持たざる者に嫉妬の目を向けられながら愛する人との１日を楽しむ。
当然遊びたい盛りの女子学生たる麻雀部の面々＋咲も例外ではない。
今日は麻雀部の部室を丸々装飾してクリスマスパーティーである。
さて、そんな彼女達がパーティーでやっていることというと、
一緒に用意した料理やお菓子を食べながら、楽しく麻雀をしている。
…よく考えたら部屋が豪華に装飾されている以外は普段とあまり変わっていないのではないだろうか。
さて、彼女たちは今も麻雀をやっているようだ。少し様子を見てみることにしよう。

おや？何やら様子がおかしいようだ。
卓には元気いっぱいの咲と衣の二人、
それと対象的に死んだような表情をしている一、その後ろには屍のように動かぬ純と智紀。
目からハイライトが消え、人生のすべてを諦めたような表情の透華。
なぜ、こんな自体になっているのか？
それは少し前に遡る。

「…一つ気付いたことがあるんだけど」
クリスマスパーティーということで部室を飾り付けし、部員と咲の６人でかわりばんごに麻雀をしていた所、
純がぽつりとつぶやき出した。
「これ、いつもと変わりなくね？」
「…言われてみればそうですわね」
部室に集まってお菓子食べながら麻雀を打つ。冬休み中とは言えやっていることは

普段と変わらないことに、
純以外の面々は、指摘されて初めて気づいた。
「じゃあさ、普段と違う麻雀をするっていうのはどう?」
そう提案したのは一であった。今思えばこの提案が後の惨劇を招いたのだろう。
「普段と違う麻雀か…」
首を傾げる衣。
それを見て咲がこう告げた。
「だったら青天井ルールとかどう?」

こうして、惨劇は始まった。

青天井ルールと言うものに関して、軽く説明をしたいと思う。
通常、麻雀の点数計算には
「符数」×「2の（翻数＋2）乗」×「和了り方による倍率補正」
という計算式が使われている。
しかし、これによって計算すると4翻以上を上がった際に1翻増えるごとに爆発的に

点数が増加してしまうため、
満貫や跳満などのリミッターが掛けられている。
そのリミッターを外し、際限なく点数が上がるルールを青天井ルールと呼称する。
青天井ルールにも様々な内訳があったりなかったりするのだが、
今回はひとまず、「役満は１３翻役」「役満の際の複合役は一部例外を除いて全て重複する」というルールで麻雀をやることになった。

「ロン！三暗刻対々和役１ドラ３！５０符８翻は２０万４８００！」
「さすが青天井、点数が派手になるねー」
最初はまだ平和だった。

「ツモ！三暗刻三槓子対々和役２ドラ４！７０符１２翻は２２９万３８００オール！」
「数え役満一歩手前じゃん！さすが咲だな！」
このあたりから何かがおかしくなって来た

「ツモ！四暗刻混老頭対々和役牌３ドラ８！５０符２８翻は５３６億８７０９万１２００、１０７３億７４１８万２４００！」

「やばすぎ」

さて、青天井は通常の麻雀と異なる点が幾つかあるが、
その一つとしてこの爆発的な点数上昇に伴って…

箱割れが存在しない　というのがある。

故に、テンションの上がった魔王二人に、他の面々は抜け出すことの許されぬ地獄に付き合うこととなる。

「ロン！リーチ河底撈魚混一色混老頭小三元対々和三暗刻三槓子役１ドラ３２！１４０符５０翻は３７８京３０２３兆６８６９億９１２１万６６００！」
「ツモ！字一色四槓子三暗刻嶺上開花役４ドラ７２！１４０符１０５翻は９０８溝６５１９穣５０２４じょ３５９４垓８３４９京９２８３兆６８５７億６１３５万１７００！」

魔王のクリスマスはまだ終わりそうにない。

宮永咲、中学3年生編
プロローグ

高校生で麻雀をやっていればほぼ確実に知っているであろう少女がいる。
宮永照。白糸台高校麻雀部所属の3年生。
2年連続インターハイ団体優勝、インターハイ・春季大会で個人戦二冠達成などの功績を持つ彼女は、
「高校生1万人の頂点」「チャンピオン」と呼ばれ、慕われたり恐れられたりしている。
そんな彼女は今日、今年度のインターハイ三連覇への意気込みを聞くためにインタビューを受けていた。
インタビューは特に変わったことも話さず、いつも通りの営業スマイルと当たり障りのない返答で進んでいたのだが…

「にしても宮永さんが高校生になられてもう3年になるんですねぇ…この年になると時間の流れが早く感じますよ。
先日も近所に住む方の弟さんがもう中学2年生になってるって聞いてこの間まで小

学生じゃなかったっけなんて感じたり…」
　いつもインタビューの終わりにはこんな感じで麻雀に関係ないフレンドリーな話をしてくれるインタビュアー。
　それを（営業スマイル全開だが）笑顔で相槌を打つ宮永照という図式が定番になっていた。
　だが、
「ところで宮永さんはご兄弟とかいらっしゃるんですか？」
　その質問は宮永照の顔を強張らせるものであった。
　すぐに表情を戻し一言、「ええ…妹がいますよ」と答えた。
「おいくつなんですか？」
「今年に高校1年生になったはずです」
「同じ白糸台に？」
「いえ、妹は長野に父親と二人暮らしなんです」
「…もしかして聞いたら不味かったですか？」
「いえいえ、私が母親の仕事の用事に付いてきただけなので」
「最後に妹さんに会ったのっていつですか？」
「そうですね…去年の秋の暮だったはずです」

いつも通りに見えるが何処かぎこちなく受け答えをする照。
しかしインタビュアーはそれに気づかずに話を進めていく。
「やはり、宮永さんの妹さんですし、麻雀は強かったりするんですか？」
「…はい、とても強いですよ」
答える照の手は僅かに震えていた。
震える手を必死に抑えるように力を込め、動揺を悟られぬよう…
「きっと、インターハイにも出てくると思います」
と、続けた。
「もしかするとインターハイで姉妹対決が見れたりしちゃうわけですね？」
「そうですね、その可能性はあると思います」
「今年のインターハイが今から楽しみですね！それでは宮永さん、最後にファンの皆さんに一言お願いします！」
「前人未到のインターハイ三連覇へ向けて、私は勿論、白糸台は精一杯がんばりますので、皆さん応援よろしくお願いします！」

…インタビューを終え、自宅へと帰る途中、照は震えていた手を握り、
（…怯えてちゃいけない。あの恐怖を乗り越えるためにこれまで努力してきた…）

そう心のなかで呟いた。

◆　◆　◆

その少女は孤独であった。
幼いころに両親を失い、親戚の家に引き取られるも、
その類まれなる才能と知識を恐れられ、半ば幽閉されているようなものであった。
引き取られた先の娘や、執事等に世話こそされていたものの、心が満たされることはなかった。
少女の唯一の楽しみは麻雀であった。
異能とも言える彼女の圧倒的な力で他者をねじ伏せて来た。
定期的に執事がそれなりの打ち手を贄として連れてきてくれた。
「今宵の贄は其方等か…少しは楽しませて欲しいものよの」
そこで繰り広げられるのは麻雀という名の一方的な暴力。
贄は驚愕し、恐怖に震える羊のようであった。
少女は「自分の好きな麻雀」を打つことで心の安寧を保っていた。
彼女と出会うまでは。

1話　邂逅

二人の出会いは少し昔、具体的には1年ほど前の話。

◆　◆　◆

最上級生として入学式の後片付けも終わり、普段と変わらぬ日常に戻っていく。

宮永咲、当時中学3年生。

本来であれば高校受験を考えるところではあるが彼女は特に考えていなかった。

家の近くにある清澄高校に通うつもりだったし、あの高校であれば今の学力で十分合格できるからだ。

かといって中学最後の年を友達との思い出づくりに使うのかと言われるとそんなこともなかった。

単純に彼女には友達が少なかったのだ。

そんな彼女の趣味は読書と麻雀であった。

最初は麻雀部に所属しようと思っていたのだが、体験入部の際に当時の先輩方をボコボコにしてしまい、それ以降出禁になってしまった。

そしてその時の暴れっぷりを見ていた同級生により、

「宮永さんが先輩をフルボッコにした」とか「宮永さんは先輩相手でも容赦がない」などという根も葉もある噂を流された結果、同級生からドン引きされて距離を置かれてしまった。

そんな訳で帰宅部3年目の彼女の友達と言えるのは鈍感野郎な京太郎ぐらいであった。

放課後、一度自宅に帰った咲は私服に着替え、ある場所に向かった。

商店街の一角にある真新しい雰囲気がある喫茶店。

とは言え普通の喫茶店ではない。いわゆる麻雀喫茶である。

昨今の麻雀ブームにより暗いイメージの強かった雀荘という施設は、明るいイメージの喫茶店と麻雀を組み合わせた麻雀喫茶に生まれ変わりつつある。

この店もまた、麻雀喫茶に生まれ変わった元雀荘なのである。当然ノーレート。

そして咲はこの辺りの麻雀喫茶の常連であった。

母親は仕事の都合で姉と東京へ行き、父親も仕事の都合で夜遅かったりすることもあり、

また、放課後を共に過ごす友達もいない彼女の放課後は、家で本を読んでいるか麻雀を打ちに行くかの二択であった。

そんな彼女が今日この店に来たのは偶然であり、強いて言えば今日はこの店の気分だったのである。
「いらっしゃい。お、咲ちゃんじゃないか」
「こんにちはマスター。卓開いてますか？」
「さっき一人抜けたところだよ。早速入るかい？」
「是非。あ、あとオレンジジュースお願いします」
卓には大学生ぐらいの男性が1人、後は３０～４０ぐらいのおじさんが２人。
いくら昨今の麻雀ブームで女性雀士が増えていると言ってもこういったところで打つのはだいたい男性である。
そんなところの常連である女子中学生な咲は割りと顔が知られている。
「咲ちゃん久しぶりじゃないか。今日は負けないからな？」
「お前さん前回もそう言ってボロ負けだったじゃないか」
「あれはお前も俺の事狙い撃ちするからだろうが」
「偶然だよ偶然、さてと、咲ちゃん待たせても悪いし始めるか」
「はい、よろしくお願いします」
こうして他の常連客との交流などもしながら、いつもの様に麻雀を始めるのだった。

◆◆◆

その日彼がその元雀荘を訪れたのは偶然であった。
以前から「お世話」になっている雀荘が麻雀喫茶になったと聞いて、近くの雀荘に寄る前に話を聞きに行こうと思っただけなのだ。

彼が入ってくるとマスターは目を見開いてから、
「これはこれは龍門渕の…ご無沙汰しております」
と言った。
「ええ、お久しぶりでございます」
「例の『アレ』の件でございますか?」
「その通りです。しかしここも様変わりしましたね」
「時代には逆らえませんわ。もう『アレ』を集められるのはあの辺りぐらいかと…」
「やはりそうですか…近頃は場数も減ってきたと嘆かれていまして…」
そう話しながら、彼は今まさにオーラスに入ったばかりの卓をちらりと見て少なからず疑問を抱いた。
「あそこの卓にいる少女は一体?」

「咲ちゃんのことですかい？あの子はここが麻雀喫茶になってからの常連客ですよ」
「強いのですか？ここは元雀荘ということもあってお客様の腕はそれなりのはずですが」
「勿論。しかもただ強いだけじゃあないですよ」
「と、言いますと？」
「彼女が来ると大体3～4回打っていくんですが、最初の1～2回は相手に花を持たせ、3回目は接戦をしたふりをして、4回目に大きく勝つ、ってのが彼女の流れですかね。平たく言うと接待が上手いんですよあの子。3回で終わると同席した人は気分良く帰っていくし、4回やった場合は次こそ勝つぞって笑って帰る」
そう話すマスターは何処か乾いた笑みを浮かべていた。そして
「彼女の本気は、そんな可愛いものではないですがね」と続けた。

龍門渕家に仕えるハギヨシと呼ばれる執事はマスターの発言に少し驚いていた。
この麻雀喫茶のマスターは元雀荘の運営者で、龍門渕家は雀荘でそれなりの腕を持ち、金に困っていそうな人を探し、金を餌に衣様への贄として差し出していた。
その際の腕前の指針としてマスターのような麻雀の腕を見極める力がある人間に話を聞いたりする。

そんなマスターがあの卓に座る少女に対して「彼女の実力は可愛くない」と言うのだ。
ハギヨシは残り数巡となったその卓に座る少女を見定めていた。
透華お嬢様は衣様の為に龍門渕高校の既存の麻雀部を壊し、衣様のための麻雀部を作られた。
透華お嬢様が見立てた衣様の友にふさわしい打ち手を集めて。
もしかすると彼女もまた、衣様の友となってくれるのではないかと。
数秒後、少女が牌を取る瞬間どす黒いオーラを感じた。
衣様が麻雀をされる際に感じたようなオーラを。
そして少女は
「ツモ。３０００・６０００です」
他を圧倒してその卓を終えた。
ハギヨシは確信した。
彼女であれば衣様を満たしてくれると。

◆　◆　◆

「だぁ～っ！今日も勝てなかった！」

「前よか全然良かったじゃん何時か勝てるって」
「咲ちゃん、次のときも4回な！今度こそ勝つから！」
「分かりました。楽しみにしてますね」
そう言って同席した3人は帰っていった。
すっかり温くなってしまったオレンジジュースを飲みながら一息ついていると、マスターがやってきて
「咲ちゃんちょっといいかい？」と言ってきた。

「咲ちゃんを紹介してほしいって人がいるんだ」
そう言って、たった今空いた卓にマスター、そして執事服を来た男性が座る。
（執事服なんて漫画でしか見たこと無いよ…）と割りと失礼な事を考えている咲に対してマスターが話を切り出した。
「こちらの方は龍門渕家からいらっしゃった執事の方なんだ」
「龍門渕って龍門渕高校の龍門渕ですか？」
「左様でございます。私、龍門渕家に使える執事のハギヨシと申します」
龍門渕高校と言えば長野でも有数のお嬢様校だ。一般市民である咲には遠い存在で

ある。

そこの理事を務める龍門渕家といえばそれはもう雲の上の存在とすら言えるだろう。

「龍門渕家の方がどうして私を?」

それは当然の疑問であった。

「宮永咲様、貴方に是非麻雀を打っていただきたい方がいるのです」

その一言にマスターは仰天したように、

「お、おいハギヨシさん!まさか咲ちゃんを!?」と叫んだ。

咲は何のことか分からないような表情を浮かべて、ハギヨシは淡々と話を続けた。

「龍門渕家には親戚のお嬢様がいらっしゃるのですが、そのお嬢様は大変麻雀がお好きでございます。しかし、お嬢様は麻雀がとてもお強く、自分と対等に戦える相手がいないと嘆いておられました。」

「えっと…そのお嬢様と麻雀を打って欲しいってことですか?」

「左様でございます。先程の対局を少し見学させていただきました。宮永様ほどの腕前であればお嬢様もお喜びになるかと…」

「見てたなら分かるかと思うのですが、私そこまで強くないですよ?」

「見ていましたから分かりますよ。貴方はまだ本当の実力を出していません。」

その言葉に咲は笑みを浮かべた。

物珍しげな視線を感じていた最後の局、勝つために少しだけ本気を出したのを目の前の執事は感じていたのだ。
咲は実力（オーラ）を隠すのが得意だ。それが分からないような相手はお話にすらならない。
分かるということはつまり『分かるぐらいの実力を持っている』か『同じようなオーラを日常的に感じている』ということだろう。
言っては失礼だが目の前の執事は強そうには見えない。後者なのだろう。
つまり『自分に匹敵する実力を持つ人間と麻雀を打って欲しい』と頼まれているのだ。

さて、咲は趣味は麻雀と言ってはいるのだが、この表現は少し間違っているかもしれない。
咲は「強者を相手に自分の全力を持って蹂躙する麻雀」が好きなのだ。有り体に言って性格が悪い。
さすがに麻雀喫茶のような場所で全力を出そうとは思わないが、
昔やっていた家族麻雀のような遠慮無用の空間では咲は全力を振るうことに躊躇がない。
そのせいで麻雀が大好きで、かつ麻雀が強い照は咲の核兵器の如き麻雀に蹂躙され、
咲を恐れ、まるで逃げるように母親とともに東京に渡ったのだ。

ちなみに咲はそのことに関しては寂しいとは思ってはいるが、まさか怖がられてるとまでは思っていない。
母親についていかなかったのも父親の世話役になるという他に単純に人混みが苦手という話である。

そんな訳で久しく強者と戦っていない咲にとってこれは絶好のチャンスであった。
しかしこの話を鵜呑みにするのは危険だとも思っていた。
実際やってみて弱かったら拍子抜けだし、それ以前に相手は金持ちなので何をするのか分かったものではない。
そこでまずは威嚇をしてみることにした。
「ふふふ、私はあれで全力ですよ」
そう言って家族麻雀を打っていた頃ぐらいのオーラでハギヨシを威嚇してみた。
これで怯えるようであればそのお嬢様とやらも大した存在ではない。
◆　◆　◆
目の前の少女、宮永咲の一言と同時に発せられたオーラを真正面から受け、ハギヨシは確信を深めた。
（衣様に匹敵するこの圧倒的なオーラ…彼女ならば間違いなく衣様の友になっていただ

ける。なんとしてもお二人を会わせたい）

そこで少し強引ではあるが、

「…お受けいただけるということでよろしいですか？」と切り出した。

すると咲は目を丸くしながらオーラを引っ込め、

「はい。お嬢様に宜しくお伝え下さい」と答えた

その後、日程などの調整を行い、今週の末にこの麻雀喫茶に咲を迎えに行くという段取りになった。

（早速、透華お嬢様にお伝えしなければ）

そう思い本来の目的を忘れ、ハギヨシは龍門渕家へと車を走らせた。

◆　◆　◆

龍門渕透華は困惑していた。

ハギヨシが突如、次の衣との対戦相手に何処とも知れぬ中学生を連れてくるというのだ。

これが全中覇者である原村和とかなら話は分かるのだが、ハギヨシ曰く元雀荘だった麻雀喫茶で逸材を発見したというのだ。

「…で、その咲って子は強いのかしら？」

「ええ、間違いなく衣様に匹敵するかと」

正直全く信じられなかった。衣のような特異な打ち手がそうそういては堪らない。
だがハギヨシは下らない嘘は付かない。だからこそこの龍門渕家で透華の執事を務めているのだ。
「…分かりましたわ。ところで他の面子はどうしますの?」
「…申し訳ございません。一刻も早くこのことを伝えるべきかと思い他の面子に関しては…」
ハギヨシがこのようなミスをするのは珍しい。いや、初めてではなかろうか。
しかしそれだけ運命的な出会いだったのだということは分かった。
透華はデジタル打ちだがオカルトに関しても理解があるのだ。
「仕方ありませんわ。当日は私も相席します」
「宜しいのですか?」
「衣の友となってくれるかもしれない人物なのでしょう?私も直接会ってみたいですもの」
(あと1人は一でも連れてくればいいでしょう)
「畏まりました。それではそのように手配させていただきます」
「でもいいんですの?…その日は満月ですわよ」

◆◆◆

ハギヨシとの約束から数日、週末が訪れた。
咲は約束通り先日訪れた麻雀喫茶の前にやってきた。
（楽しみだなぁ…小学生の頃のお姉ちゃん程度には強いと良いんだけど）
咲の強者の基準は照である。少なくても小学生の頃の照程度には強くないと麻雀にもならない。
だがその辺りは先日威嚇した際に冷や汗一つ欠かなかったハギヨシを見ているので心配にはなっていない。
（さて、どうせまだ時間はあるしコンビニで飲み物でも…）
そう思っていると一台のリムジンがやってきて、目の前で止まった。
リムジンの運転席から出ていたのはハギヨシであった。タイミングが完璧である。
「お待たせいたしました咲様。お嬢様も楽しみにお待ちです」
リムジンでの迎えなど一生縁がないと思っていた咲は内心テンションが上がっていた。
ハギヨシがドアを開け咲を案内する。

リムジンの中はそこが一つの部屋であるかのように広く、テーブルの上のワインラックにはいかにも高そうなワインが入っていた。
テンションが上がる一方で今更ながら凄い場違い感を感じている咲。
特に着飾ってるわけでもなく普段通り私服なのだ。
「お屋敷までは少々お時間がかかります。お好きなものをお飲みいただいてお待ち下さい」
「いや、私未成年なんですけど…」
「冷蔵庫の中にジュースが入っておりますので、そちらをどうぞ」
（冷蔵庫までついているのかこのリムジン…）
言われるまま冷蔵庫を開け、その中に入っていた牛乳を飲むことにした。
リムジンの中で牛乳を飲む女子中学生はすごい違和感のある図であった。

龍門渕の屋敷に到着し、客間に案内された咲。
リムジンの中もすごかったが、屋敷の中はもっと凄かった。語彙力が足りなくて表現が追いつかない程度には。
そこで咲は、自分が今すごい状況に置かれていることに気づいた。
（あれ、私って麻雀をしに来たはずだよね）

そう思っていると客室の扉が開き、一人の金髪の女性と、付き従うように一人の活発そうなメイドが入ってきた。
「龍門渕家へようこそ。あなたが咲さんですね？」
「はい。宮永咲と申します。本日はお招きいただきましてありがとうございます」
「私（わたくし）、龍門渕透華と申します。こちらはメイドの…」
「国広一といいます」
「あまり堅苦しいのもあれですので、早速本題に入らせていただきますわ」

◆　◆　◆

そう切り出して透華は話を続けた。
「私の従姉妹である天江衣と麻雀をしていただきたいんですの」
「ええ、そう聞いていましたからそのつもりです」
「ただ、衣の強さは強い弱いとかそういう次元ですらありませんわ。申し訳ないのだけれどもあなたが衣と対等に戦えるようには思えないのですの」
「ふふふ、それは楽しみですね」
そう言って目の前の中学生、宮永咲は軽く笑みを浮かべた。

その瞬間、得も言えぬ恐怖を感じた。まるで衣と初めて対局した時のような圧倒的力のオーラを。
（ハギヨシが太鼓判を押すだけありますわね…）
「…ひとまず衣の部屋へ向かいましょう。卓もそこに用意がありますわ」
そう言って咲を連れ、衣の部屋へと向かった。

「衣、来ましたわよ」
そう一言告げて扉を開けると、すでに卓に座って待っていた天江衣がいた。
「おお、来たか。久方振りにトーカと卓を囲めると聞いて楽しみにしていたぞ」
「ええ、最近は中々機会がありませんでしたものね」
「して、今日の贄は其奴か」
そう言って衣は咲の方を見た。
「初めまして、天江衣さん。宮永咲と言います」

後に「龍門渕の一対の魔王」と称され、高校麻雀界にその名を轟かせる怪物二匹、その邂逅の瞬間である。

2話　交流

天江衣は内心失望していた。

贄として連れてこられたのはどう見たって少女で、それも聞くところによれば年下である。

今更年下の娘とどうしろというのだ。仲良くおままごとでもしてろというのか。

衣は圧倒的強者である。

同学年の有象無象なぞ物の数ではないし、透華を含む他の麻雀部の面子も他より手応えがあるとは言え負けることはない。

ましてや年下なぞ大会上位者であろうが負ける気は微塵もしない。

そもそも名前すら聞いたこと無い相手なのだ。

雀荘で生計を立てるような腕に覚えのある連中ですら逆立ちしたって自分には勝てないというのに、ましてや名も知らぬ中学生雀士なぞ相手にもなるはずもない。

（ハギヨシの太鼓判というから期待していたものを…拍子抜けだな）

強者は見ただけでそれと分かるオーラを放っている。オーラにより人を威圧することなど容易である。

雑多の嫌いな衣はそのオーラを人払いに使っていたし、ましてやわざわざ隠す必要など感じなかった。
強者はその堂々たる姿、堂々たる力で弱者を支配するものだと考えている。
故に見た限りオーラを感じぬ眼の前の贄を弱者と切り捨てた。
そしてそれを連れてきたハギヨシと透華に少なからず失望した。

衣は圧倒的強者である。
敗北を知らぬゆえの驕り、身内への失望、それが目の前の存在の力を見誤らせた。

◆　◆　◆

（なるほど、生贄か…）
咲は今日、自分がこの場に呼ばれた本当の理由を理解した。
そしてあの時のマスターが何故叫んでいたのかも分かった。
（やってくれるね…あの執事さんも）
目の前の小学生にしか見えない少女から隠す気もなく放たれるのは紛れもなく強者のオーラ。

年齢は聞いていないが透華さんと同年代なのかもしれない。一応年上だ。
ちょっと怒りも混ざったそのオーラは咲を昂ぶらせた。
天江衣、彼女は強者を渇望していた咲にとって、ここ数年で最高の『御馳走』であった。

挨拶もそこそこに、早速部屋に用意されていた卓に着く４人。
「２５０００持ちの３００００返しでよろしいですわね？」
「好きにするがいい」
透華の問いかけに半ば不貞腐れている衣が答える。
それを後目に咲は
（実力を図るためにも最初はあれでもやるかな）
端から負ける気など無いが、１戦目に限っては勝つつもりもない。
（さて、見極めさせてもらおうかな、天江衣さん）

東一局

咲　２５０００　親
一　２５０００
衣　２５０００
透華　２５０００

配牌を見た時、咲は少し疑問を抱いた。
（あの強いオーラ、間違いなく場に干渉するタイプの支配系だと思ったんだけど、配牌は普通だね…）
そう感じていたものの、その局の終盤に差し掛かり違和感を覚える。
（あれ、向聴数が減らない…）
手が一向聴のまま止まっているのだ。
そして流局から1順前に対面の衣から…
「リーチ」
（ツモ切りリーチ、わざわざこのタイミングってことは…）
今回は下家が鳴いているので海底は対面の衣。つまり…
「ツモ、海底撈月」
最後にツモった一筒にてツモ和了りしてみせた。

（…そういう事か。しかも一筒撈月とはまた味な真似を）

古役の一つに一筒撈月と言うものがある。その名の通り一筒で海底撈月を和了るという特別役である。

点数はまちまちだが、場所によっては役満としていたところもあるそうだ。

この卓では当然採用していない。今回の和了りは『立直、一発、門前清自摸和、海底撈月』の満貫である。

珍しいものを見せてもらったお礼を兼ねて、

「１６０００払いましょうか？」と言ってみせた。

その一言に衣は少なからず怒りを露わにし

「凡夫が思い上がるでないぞ」と答えた

卓が進み現在は南四局。

咲はここまでの情報を元に目の前の御馳走の解析をしていた。

（当初思っていたとおりやはり場の支配の能力者。向聴数が一向聴から減らなくなる。正確には聴牌するための牌が山から引けなくなる。さっき試したら槓材は問題なく集まるし、槓したら有効牌持ってこれるから私からしたら大した支配じゃないね。後は海底撈月が自由自在ってところか。聴牌を制限して自分は海底撈月で打点を伸ばせる。

良い能力だ）

姉である照は一局で相手の打ち方から能力まで全部見通せる照魔鏡とかいうチート能力（咲談）を持っているが、咲は相手の打ち方から能力を見通す事のできる分析力を持っている。さしずめ白眼である。目は白くならないが。

（とはいえこの程度の支配ならここまで強いオーラは出ないはず。本気を出していないのか、本気をだすのに条件があるのか…）

と少し考えた後、

（ま、調整には困らないし、何かあったらそのときに考えようっと）

そう思考を放棄して、点数調整を行った。

「ツモ、１２００・２４００です」

◆　◆　◆

対局終了

咲	３０４００	±０
一	１５６００	△１４
衣	３７２００	＋２７

透華　１６８００　△１３

衣はこの結果に困惑していた。
久々の透華との麻雀を楽しむため長引かせようとは思っていたが、少なくとも目の前の贄は飛ばすつもりだった。
しかし終えてみれば飛んでないどころかマイナスにすらなっていない。
（手加減しすぎたのか…？）
今夜は満月だが、時刻は昼を少し過ぎた頃。確かに衣の本領を発揮する時刻には至っていない。
だが、例え新月の昼であろうと凡百の雑魚であれば蹴散らすのは造作もない。
（考えを改める必要があるな…やはりハギヨシは嘘はつかぬ男よ）
そもそも何度か和了られたのだ。それだけでも目の前の存在が贄などではなく、自分と戦う資格を持つ存在ということを示している。
衣は目の前の少女に向き合い、
「改めて名を聞かせてくれ」と告げた。
「宮永咲です」
「咲か…どうやら其方に手加減は不要らしい」

「ええ、ぜひ全力でお願いします」
そう応えた咲から先程までは感じなかった圧倒的なオーラが放たれた。
そのオーラを受けて衣は（…そうでなければ面白くない）と笑みを浮かべた。
「其方も本気など出して無かったということか」
「さあ、どうでしょうか」
「戯けが…まあよい、次の宴を始めるとしようか！」
魔王の宴はまだ始まったばかり。

◆　◆　◆

その日の出来事を、同席していた龍門渕透華の専属メイド、国広一は後にこう話す。
「透華のメイドになってから時折衣様のお世話もさせてもらうことがあるんだけど、日が浅かったとはいえあそこまで満面の笑みを浮かべていた衣様は見たことなかったよ。笑顔なんだけど雰囲気は凄い怖かったんだけどね」
「まあ、対局自体はもうメチャクチャで、ボクはもう飛ばないようにするだけで限界だったけど…結局何度か余波で飛ばされたし…」
「それであれは、確か日が落ちて月が地平線に顔を出し始めた頃だったかな」

「今まで数局の間、天変地異もかくやと荒ぶっていた衣様と咲ちゃんのオーラが、すーっと収まっていったんだ」
「その時、ボクの前に座っていた透華の目から光が消えていくのが見えたんだ」
「その透華は、今まで見たこともないぐらい冷たくて透き通った雰囲気だったよ」
「そこからの対局は…」
「なんというか、別次元を見た気がしたよ」

3話　友達

怪物二匹は互いの限界を探るように力を解放していった。
嶺上開花と海底摸月が乱発される異常空間は、回数を重ねるごとにその荒々しさを増していく。
無論、数をこなせば時間が立つ。もうすぐ日も沈み、衣の実力が発揮できる時間帯になる。
衣が支配を強め咲の嶺上開花を阻止し海底摸月を和了れば、
それに応えるように咲も支配を強め、嶺上開花を和了る。
二人共ツモ和了りなので余波で透華か一が飛ぶ。
（卓を重ねるごとに支配が強くなっていく…単にこちらを試しているのか、はたまた条件を満たしつつあるのか）
咲は現状を楽しんでいた。
目の前の御馳走は想定以上に美味であった。ここまでの強者はそれこそ姉以来である。
（まあ、相性の関係で私が負けることはまずあり得ないね。私に勝つなら王牌に直接干

渉するか、配牌から槓材を壊すぐらいしてくれなきゃ）
とは言えこんな御馳走、次にありつけるのは何時か分からない。
咲はこの至福の時間を長く愉しむため、全力を出さなかった。

◆　◆　◆

（宮永咲…間違いなく衣と同じ領域に立つ存在）
目の前の中学生雀士は全力を出していないとはいえ自分の支配を破るほどの力を持ち、破天荒な和了りを魅せてくれる。
過去にこれ程の打ち手を相手にしたことのなかった衣は、歓喜に震えていた。
その一方で
（…彼女は、衣の莫逆の友となってくれるだろうか）
そう思っていた。
全力を出した時、自分はまた恐れられ距離を置かれるのではないか、今までがそうだったように…
その恐怖は衣に全力を出すことを否定させた。
しかし、その楔は思わぬ方向から壊されることになる。

◆◆◆

地平線に日が沈み、満月が顔を出し始めた頃。
その変化は些細なところからだった。
「カン」
今日何度目か分からないカンから、嶺上牌を手に取り咲は疑問符を浮かべた。
（あれ、有効牌じゃない…？）
嶺上牌が有効牌ではないことなど通常の麻雀では普通であるが、咲の麻雀に普通の思考は通用しない。
槓材が集まり、嶺上牌として有効牌が手元に来る。それが咲の普通なのだ。
（天江衣さん…長いし呼びづらいし衣ちゃんでいいか。これは衣ちゃんの支配ではないね。こんなことできるなら最初からやってるはず）
嶺上開花の阻止のために何度か暗槓や大明槓を阻害されたことはあれど、嶺上牌を不要牌にされたことはない。
そんな事ができるならとっくにそうしている筈なのだ。
（かと言って他の２人の能力じゃないはず…手加減しすぎてるのかな）

その場はひとまず原因は「全力を出していないから」としておくことにした。
（となればこの局は衣ちゃんが海底摸月を和了るね）
槓材もない、衣の支配下なので嶺上牌以外のツモには期待できない。であれば諦めが肝心。
そして流局1順前
「リーチ」
こちらも本日何度目か分からない流局直前リーチ。もはや見慣れた光景である。
しかし、海底牌をツモった後、衣はそのまま牌を捨てた。
衣の支配の関係で聴牌しているのは衣のみではあるが、衣の顔には少なからず驚愕と疑問の表情が見え隠れしている。
（和了り放棄ではない…失点が減るからありがたいとはいえ、不気味だね…）
今日の対局の中で初めての流局。
一人の少女の血が今、目覚めつつある。
不自然に終わった前局に疑問を持ちつつも、牌を取り理牌していく。
そして数巡、とある違和感に気づいた。

（槓材が来ないし、ツモも極端に悪いわけじゃない…強いて言えばあまりにも普通）

咲が力を発揮していれば槓材が来るはずだし、衣が支配を行っているのであればツモは悪いはずだ。

だが現状はその両方に当てはまらない。疑念は増すばかりだ。

「立直」

その咲の思考を掻き消すように上家からリーチの声が上がる。

上家…透華から発せられたその声は感情のようなものが希薄に思えた。

対面の衣には先程よりも強い驚嘆の表情が伺える。

そして数巡後、透華はツモ和了りを宣言した。

1戦目以降初となる、『咲と衣以外のツモ和了り』である。

そして牌を倒した瞬間、咲は今まで感じていなかった、否、気づかなかった凄まじい力を感じた。

それは自分たちの力（オーラ）を押さえつける程力強く、しかし透き通った力（重力）であった。

（透華さんから凄まじい力を感じる…今まで隠していたとでもいうの？にしては初対面の時特に何も感じなかったし…）

衣の表情を窺い知るに、恐らく透華の力だと気づいたのだろう。そして、

「成程、これが龍門渕の入婿が憂懼していた龍門渕の血の力、というわけか…」と呟いた。

透華の瞳には光がなく、その瞳はまるで深淵を覗くかのように暗い。
だが、解き放たれるその力は方向は違えど、まさしく強者に匹敵するものである。
「この卓、この面子がトーカの血を目覚めさせた…宮永咲、どうやらこの力、衣達の全力に値するようであるが…」
「…そうだね、様子見は終わりみたい」
「そうこなくてはな。宮永咲！龍門渕透華！御戸開きと行こうか！今宵の宴はここからが本番よ！」

新たな強者の登場に咲は喜んだ。極上のディナーに至高のデザートが付いてきたと。
透華の目覚めに衣も喜んだ。奇幻な手合が増えると。
そして一対の魔王はこの日初めて『本気を出した』

…天変地異という表現すら生ぬるい程の混沌とした対局は、透華の気絶という結果で唐突に幕を閉じた。
自分たちのせいで気絶させてしまったのだろうか、という罪悪感に駆られた咲と、対

局中の堂々たる姿とは打って変わって透華にしがみつき見た目相応に泣きじゃくっていた衣は、一先ず翌日に再び咲が龍門渕家を訪れるということでその場は解散となった。

帰りのリムジンの中で、

「ハギヨシさん、透華さんは大丈夫なのでしょうか？」

「龍門渕家には優秀な医師の方もいらっしゃいます。宮永様はご心配なさらぬよう…」

「…分かりました」

と言ったやり取りをし、そのまま咲は家路についた。

そして翌日、前の日と同様にハギヨシさんの迎えにより龍門渕家を訪れた咲は、客間に通された。

そこには俯いて表情を窺い知ることの出来ない衣がいた。

昨日の今日ということもあり声をかけるのを躊躇し、大人しく椅子に座って待つこと数分。

昨日同様扉を開いて透華が一に連れられて姿を現した。

その姿を確認すると衣は飛び上がり、

「トーカ！大丈夫なのか!?」
「ええ、心配をかけてしまったようですわね。私はこの通りピンピンしてますわ」
　咲と衣はホッと胸を撫で下ろす。
「宮永さんも折角お越し頂いたと言うのに、申し訳ないですわ…」
「いえ、気にしないでください。責任の一端は私にもあると思いますし…」
「うむ、衣も少しやりすぎてしまったと思う…」
「そんなことありませんわ。衣があそこまで楽しそうに麻雀をしているのを見たのは初めてでしたもの。私としては喜びはしても怒るようなことはありませんわ」
　そう言う透華は笑みを浮かべていた。
「そうだなあれほどの手合はそういない。衣も楽しかった！」
　衣も満面の笑みを浮かべそう答えた。
「そして宮永さん、衣と打っていただいて有難うございます」
「私も天江さんと打てて楽しかったです。お誘いいただいて有難うございます」
　咲は心の底からそう思う。とても愉しい時間であった。
「それは良かったですわ。もしよろしければ…」
「トーカ、そこから先は衣に言わせて欲しい」
「…！分かりましたわ」

「宮永咲、もしよければ今後も衣と麻雀を打って欲しい！」
衣は答えを確信しているかのような眼をしていた。
事実、咲の答えは決まっていた。
「勿論！喜んで！」
満点の笑顔を持って咲はそう答えた。

「それでは衣達はこれから友達だ！」
「よろしく！衣ちゃん！」
「さあ、昨日の続きといこうか！今日は最初から全力でいくぞ！」
「ふふっ、それじゃあ私も全力でいかなきゃだね！」
「昨日出会ったばかりというのに、既に意気投合してますわね。微笑ましいですわ」
「それだけ二人の相性がいいってことなのかな」
「トーカ、早く衣の部屋にいくぞ！」
「分かってますわよ！さ、一も行きますわよ」
「うげぇ…今日は何回箱割れするのかな…」

◆◆◆

この日を境に咲と衣は友となり、定期的に卓を囲むこととなった。

それからは衣にも変化があった。

学校では今までのような超然とした立ち振舞は鳴りを潜め、明るく振る舞うようになったおかげなのか本人の小動物的な可愛さのおかげなのか、友達と呼べるような存在も少なからず出来た。

最初こそ透華の父親はあまりいい顔をしていなかったものの、透華と咲という存在が抑制剤になってくれるだろうとある程度妥協したそうだ。

そうして龍門渕高校1年生の衣率いる龍門渕高校麻雀部はインターハイ出場。

予選で三校同時飛ばし、初出場で長野予選通過、衣はプロアマ親善試合優勝しＭＶＰ取得などやりたい放題やった龍門渕高校は再び強豪校として名を連ねることとなった。

ついでに衣のファンクラブが出来た。

インターハイ全国では準決勝副将戦にて他校が飛ばされ三位敗退となってしまったが、来年は必ず優勝すると大会後のインタビューにて衣が答えていた。

そうして時間は流れていく。

4話　白糸

場所は変わって白糸台高校。
宮永照、当時高校2年生。
インターハイも終わり白糸台は団体戦二連覇を達成。その確固たる地位を築いた。
とはいえ麻雀もやらなければ腕は鈍るもの。インハイ終了後も麻雀部は特訓を続けている。
寒さ増してくる秋の暮、照は部長の弘世菫に相談を持ちかけられていた。
「照、淡のことなのだが…何とかならないだろうか？」
「…何とかとは？」
「あいつの振る舞いは正直なところ目に余る。かと言って私が注意をしたところで聞く耳を持たないだろう？」
「私も少しは言ってあるよ？」
「照のは注意になってないだろう…」
白糸台高校に将来有望な打ち手として監督が連れてきた女子中学生、大星淡。
彼女もまた、照と同じく圧倒的強さを持つ能力者であった。

3軍や2軍メンバーでは相手にならず、1軍メンバーもある程度戦うと照のいる攻撃特化チーム以外歯が立たなくなっていた。

しかし、その強さが原因なのか淡は他者への思いやり的なものが欠如している。

自分より弱い者の話を聞く気は無いし、監督の誘いも興味本位だったと言っている。

唯一、自分より強い照には素直に懐いているのだが、照はそういった指導的なことが苦手だ。

個人の戦力としては申し分ないのだが、団体戦となるとその傲慢な態度は問題である。

菫はそんな淡を何とか出来ないだろうかと考えていたのだ。

「やはり、照以外の相手に一度負けるぐらいしないと駄目なのかね…」

とはいえ圧倒的強さを持つ照じゃないと勝てないような相手である。プロの一部なら勝てるかもしれないがそんなコネは持っていない。菫の発言は半ば諦めを含んでいた。

しかし照は、淡を負けさせる事のできる程の強者に覚えがあった。

「…一人、そういう相手がいる」

「本当か！是非教えて欲しい！」
「別にいいけど連れてくるのは難しいと思う。中3だから受験とかあるだろうし」
「淡と同学年なのか！それは尚更いいぞ…さすがのあいつも同年代に負けたとなったら少しは凹むだろう。じゃあ淡と一緒にその人のところまで遠征でもいい！監督には私が話をつける！」
必死な形相の菫に少し驚きつつも照は淡を連れて『その人』の元へ行くこととなった。
淡には照から伝えておいてくれ、と言われた照は部室の一角にあるソファに寝そべりポテチを咥えながら雑誌を読んでいる淡に声をかけた。
「淡」
「んー？どうしたのテルー？」
「私と一緒に長野に行って欲しい」

その週の末、照と淡は昼前に長野を訪れていた。
この移動に関しても色々とあった。

宮永照は方向音痴である。そして東京駅とは現代に存在するダンジョンである。
淡がトイレや売店に行っている間に照が迷子になっていると言ったことが今日だけで2回あった。お陰で本来の到着予定時刻を大幅に過ぎてしまった。
そのことに関して照は「その為にわざわざ朝早く出るようにした」と発言している。
迷子になり時間を潰すことを前提とした発言に淡は少し呆れていた。
駅に着くと父親が車で迎えに来ていた。思えば父親に会うのも1年ぶりぐらいである。

「お父さん、お久しぶり」
「ああ、久しぶりだな照。そちらのお嬢さんは？」
「大星淡。私の後輩？になるのかな」
「そうか、初めまして大星さん。照の父親です」
「初めまして。大星淡です」
「ところで今日はどうして長野に来たんだ？」
「咲に会いに来たの」
「そうか、この時間ならまだ家にいるはずだから、取り敢えず乗って乗って」
「うん、淡行こう」

◆　◆　◆

大星淡は困惑していた。
突然照から長野に行くと言われ、付いてきてみれば照の実家帰りである。
いつものような無表情ではなく、少し柔らかい表情を浮かべる照と父親は何処にでもいる家族をしていた。
何故照の実家帰りに自分が付き合わされているのか。最初は照の方向音痴が原因かと思ったがどうも違うようなので、照の実家へ移動する車の中、取り敢えず聞いてみることにした。
「ねえテルー？なんで私に付いてきてって言ったの？」
「あれ、言ってなかったっけ」
「うん、聞いてない」
「…淡に打ってもらいたい人がいるの」
淡は尚更意味不明であった。
打つとは勿論麻雀のことだろう。だが今更誰と打てというのだろうか。
照以外には本気を出せば負けないと思っているし、照以外と打つことに意義を感じない。
もしかすると照の知り合いのプロとかなのかもしれない。なので重ねて聞いた。
「誰と打つの？」

「私の妹」
「え、テルー妹いたの？」
「うん。言ってなかったっけ」
「聞いてないよ」
誰と打つかははっきりしたが、何故わざわざ来たのかまでは分からなかった。
照の妹というからにはそれなり以上には打てるのだろうが、それでも負ける気はしなかった。
そうこうしているうちに照の実家へと到着した。
「父さんはこのまま買い物に行くから、照達はゆっくりしていってな」
「分かった。淡、入ろうか」

家に入るとすぐに一人の少女が迎えてくれた。
「お姉ちゃん！久しぶりだね！」
「そうだね、咲。元気だった？」
「勿論！お姉ちゃんが急にこっちに来るって聞いてびっくりしたよ。…ところでそちらの人は？」
「大星淡。私の後輩。咲と同い年だよ」

「そうなんだね。初めまして淡ちゃん。お姉ちゃんの妹の咲です」
「初めまして、今日はよろしくね、サキー」
「それで、お姉ちゃんたちは今日は何しに来たの？」
「テルー、もしかして話してないの？」
「…忘れてた」
「えっとね、淡と麻雀を打って欲しいの」
そう言われた咲は観察するような目で淡を眺めると、
「…そういうことだね」と答えた。
「丁度これからある場所に打ちに行くつもりだったから、一緒に行ってそこで打とう」
「何処へ行くの？雀荘とか？」
「友達の家だよ。そろそろ迎えが来ると思うんだけど…」
咲がそう言うと外から父親の車とは別な車の音が聞こえてきた。
「あ、来た。さすがハギヨシさんだなぁ」
家の前には一台のリムジンが止まっていた。
そのよく分からない状況に思考が追いついていない照と淡を後目に、咲は運転手と何か話しているようだった。
しばらくすると咲が「一緒でもいいって！じゃあ行こうか！」と言ってリムジンに乗

り込んだので、二人も咲と一緒にリムジンへと乗った。

◆　◆　◆

リムジンに乗り込み、運転手に自由に飲み物などを飲んでいいと言われると淡は早速冷蔵庫を漁り始めた。

それを後目に咲は小声で、

「で、淡ちゃんを連れてきたのはどんな意図があるの？」

と聞いてきた。

「淡を一度こてんぱんに負かせてほしいらしい」

と簡潔に目的を話した。

「誰に頼まれたの？」

「うちの麻雀部の部長」

そう答えると咲は、冷蔵庫からトマトジュースを取り出し飲みだした淡を一瞥し、

「…そっか」と一言呟いた。

その後は特に話すこともなく、リムジンは何やら門をくぐり、その先の屋敷に進んでいった。

屋敷に到着し、客間と思われる場所へ通されると一人の女性と彼女に給仕をするメイドがいた。

「咲さん四日ぶりですわね…そちらの方々は？」
「透華さんこんにちは。こちらは私の姉と…姉の後輩？」
「初めまして、姉の照と言います」
「初めまして。お姉さんの話はよく咲さんからお聞きしていますわ」
「そうでしたか、咲が普段お世話になっています。こちらは私の後輩の淡です」
「…はじめまして」
ここに来てからどうも淡の様子がおかしい。
もしかするとこの豪邸と言える屋敷に気圧されているのかもしれない。
「ぜひ淡ちゃんと衣ちゃんを打たせてみたいと思って連れてきたよ」
「そういうことでしたか。それでは…」
透華が言葉を続けようとした時、部屋の扉が開き一人の少女が入ってきた。
うさみみのような赤いヘアバンド、幼い容姿。その姿には見覚えがあった。
（…天江衣）
団体戦長野予選で三校同時飛ばしをし、親善試合で優勝をもぎ取った。
団体戦は大将戦前に決着が付いたせいで直接戦ったことはないが、間違いなく自分の全力に匹敵しかねない相手。
咲はこんな怪物と交友があるというのか。

「咲！来てたんだな！早速打とう！」
「今日も来たよ衣ちゃん！今日はゲストを連れてきたよ」
「そこの二人のことだな？片方は分かるぞ、インハイ王者だ！」
「私もお姉ちゃんと打つの久々だから楽しみなんだ、早速準備しにいこうか！」
「うん！」
　そう言って咲と衣は部屋を出ていった。
「全く、相変わらず二人揃うと騒がしくなりますわね」
　透華は少し諦めを含むような呟きを漏らしていた。

5話　譲渡

部屋を一足先に出た咲と衣の二人は、卓の準備をする傍らとある話し合いをしていた。
「お姉ちゃんの後輩で淡ちゃんって言うんだけど、お姉ちゃん曰く淡ちゃんを倒して欲しいらしいよ」
「そうなのか？確かにある程度できそうな感じではあるが、わざわざ咲と打つほどじゃないと思う」
「うん、私もそう思う。でも実力を隠している可能性も否定できない」
そう言うと咲はポケットから飴玉を取り出し、
「なので、1局目は様子見をするよ」と言った。
「様子見をして、私の出番があるようなら本気を出すけど…」
「けど？」
「そうでないなら淡ちゃんは『譲る』よ」
◆　◆　◆
二人が部屋を出ていった後、透華も

「私も少し用事があるので離れますわ。客人も増えたことですしお菓子も多めに用意させないといけませんわね」
と言って部屋を出ていった。
部屋には照と淡の二人きりとなった。
そのタイミングを見計らっていたのか淡が口を開き、
「ねえテルー、これは予定通りなの？」と聞いてきた。
「予定通り？」
「だって今年のインハイのＭＶＰでしょあの子。サキと打たせるって言いながら天江衣と打たせるのが目的だったってことじゃないの？」
照はなるほど、と思った。
今まで全くと行っていいほどメディア露出は勿論公式の場に姿を現さなかった咲より、今年大暴れした衣のほうがメインに見えるのは仕方ないことだろう。
「私もこうなるとは思ってなかったよ」
「そうなの？」
「でもいい機会だと思う。思う存分打ったらいいよ」
「でもなー、本気を出す必要あるのかなー」
「そうやって油断して一度酷い目に合えばいい…」

「ん、照何か言った？」
「なんでもない」

その後、卓の用意を終えた二人と共に透華も戻ってきて、いよいよ対局といった流れになった。
卓は衣の部屋にあるということで部屋に向かうのだがその前に照は咲を呼んだ。
「どうしたのお姉ちゃん？」
「えっとね、少し言いにくいんだけど、私は打つ気無いんだ」
「えっ、どうして？」
「というより打てないと言ったほうが正しいかもしれない。ほら、私は白糸台高校で龍門渕さんや天江さんは龍門渕高校だから…」
「あっ、そういえば他校との交流試合は出来ないんだっけ？」
「そういう事。だから楽しみにしてもらって悪いんだけど…」
「そういうことなら仕方ないよ。淡ちゃんは任せてもらっていいよ」
嘘である。
今はインハイ期間中ではないので交流試合は問題ない。
では何故わざわざこんな嘘をついたのか。

半分は淡を負かせるという目的のため。
自分が同卓してしまっては「照が強いから負けた」とでも言いかねない。
そのためには同卓しないのがベストと言える。
もう半分は保身のため。
単純に咲と打ちたくないのだ。
幼いころに散々痛めつけられたトラウマはそうそう癒えることはない。
そのトラウマを乗り越えるために編み出した『対咲最終兵器』もこんなところで使うべきではない。
故に嘘をついてでも咲との勝負を流した。
少し公式ルールを知っていれば気づくような嘘だが、咲はそういうのに疎いので問題ないだろう。
「それじゃあ私は後ろで見てるから」
そう言って衣の部屋に入って既に卓についている淡の後ろについた。
「あれ?テルー打たないの?」
「うん、私が打っちゃ意味が無いからね」
「そうなの?よく分かんないけどまあいいや」
こうして咲、衣、淡、透華による対局が始まった。

◆　◆　◆

「リーチ！」

東一局1巡目、その声と同時に淡は牌を横に倒し１０００点棒を場に供給する。淡お得意のダブルリーチである。

本気を出すかどうか悩んでいたが、実力を計る意味でもここは力を見せつけることにした。

（ＭＶＰって言っても所詮は1年。テルや私には届かないでしょ）

数巡後、当然のようにツモ和了り。裏ドラも乗せてダブリードラ４の跳満。

（うん、調子はばっちり。三人まとめてさっさと飛ばして凹ませてやろうっと）

自分の調子を確かめるように牌を倒す。その姿には慢心が見え隠れしている。

故に他人のことなど気にもしてないし、ましてや薄ら笑いを上げる魔王達に気づくこともできなかった。

南４局終了

咲	１３０００	△１７
衣	１１６００	△１８
淡	６６４００	＋５６

透華　９０００　△２１

1卓目が終わり、点数だけを見れば淡の圧勝。

しかし、誰も飛んでいないから少し不満げな淡。何故かしかめっ面してる照。

そして大敗したというのに落胆の表情など欠片も見せない透華。勝った本人より笑顔な咲と衣。

競技性の無い、いわゆる「遊び」であるとはいえ結果から見えない各自の表情がそこにあった。

（跳満3回しか和了れなかった…4～5回は和了って南場の途中で終らせるつもりだったのに）

不満げな表情を浮かべ、最後の和了りを見つめる淡。ダブリーのみのロン和了り。

八索の嵌張待ちのダブリーの2順後、咲が切ったロン牌に牌を倒し卓が終わった。

（とにかく、二人共テルが勿体ぶる程強いわけじゃない。何で私を連れてきたんだろう？）

疑問こそ残るが結果が全て。何にせよ勝った。一先ずはこの勝利に価値があったかは後で照に聞こう。

そう思った時、後ろで何かを考えるようにしかめっ面していた照が口を開いた。

◆　◆　◆

「…咲？」

それ以上は淡の前では言えない。

なぜ手を抜いた？

それを言えば一番激昂するのは淡だろう。

自分より格下（淡目線）の相手に手を抜かれたなどと言われようものなら淡がどのような暴言を言おうものか。

故に敢えて続きの台詞を伏せた。

だが咲は気づいてくれたようで。

「あはは、お姉ちゃん…買いかぶり過ぎだよ」

そう一言返した。

淡は持てる力の全て、とは言わないが見た限り6～8割は出していた。

格下相手にさっさと終わらせようとするときの淡の悪い癖だ。白糸台で何度も見てきている。

それでも強豪校として名を連ねる白糸台麻雀部ですら彼女に勝てるのは照だけだ。

「あ、そうだ衣ちゃん。これあげるよ」

そう言って咲はポケットから飴玉を取り出し、衣の方へ放り投げた。

衣はそれを受け取ると、
「貰ってもいいのか？」と聞き、
笑顔で首を縦に振る咲を見るとわーいと言って飴玉を口に含み…
「ではもう一局やるとしようか」
「茶番は終わりだ」

そう言うと目の前の赤リボンの少女は目を見開き、飴玉を噛み砕き、
子供の頃の思い出（トラウマ）を想起させるようなどす黒いオーラを放っていた。
そのオーラを直に受けた淡は顔が引きつっているようにも見える。

目の前の少女が放つ他を圧倒する威圧感。
それを感じ照は、先程の言葉に隠された意味を感じ、寒気を感じた。
買いかぶり過ぎ？咲のことを？そんな意味ではない。
咲はこう言っているのだ。
『この程度の雑魚、私が手を下すまでもない』と。

6話　治水

1局様子を見て、咲は姉の後輩である淡の能力をほぼ見抜いていた。
高確率で初手テンパイを引き込み、ダブリー後特定のタイミングでカンを入れると裏ドラがもろ乗りする。
分かりやすい跳満連発能力。あーゆーシンプルなのはシンプル故に強力だ。
あのまま適当に大会に放り込んでもそれなりの順位ならすぐに取れるだろう。
だが、シンプル故に対策も容易。
簡単に思いつく対策だけでもダブリーさせない、されたとしても和了らせない、和了られる前に和了る、などなど…
咲ならカンでツモをずらしてツモ和了りなどさせないし、カンされたときの嶺上牌を狩れる。
衣ならそもそもダブリーさせないし、されても和了り牌など引かせない。
そうなれば淡などその辺の有象無象以下。
ただのツモ切りマシーンごときに咲も衣も負ける要素は微塵もないのだ。
故に衣に譲った。

そもそも初期配牌が弄れるのなら役満聴牌したり天和地和ぐらいやってほしいものである。

まあ、そんなことされるのはゲームの中だけで十分。

「お前等やる気ないだろ」とか「本気でぶつかってきやがれ」と言われ何回ノーコンクリアを妨害されたか。

…ともかく、淡は咲が戦うような相手じゃない。

衣も同じ意見だろうし、この程度なら衣にも勝てないだろう。

だから、衣は言葉を続けた。

◆　◆　◆

「…とはいえ、すぐ終わらせるのも興醒めであるな…一つ、あれを試すとしよう」

隣りに座る赤リボンの少女がそう言う。

茶番は終わり？興醒め？

たった今自分に負けた相手にそんなことを言われてなんとも思わないような淡ではない。

「ふ、ふん。全力じゃなかったから負けたなんてよくある言い訳だよね」

少女が放つプレッシャーに少し震え声になっている自分を抑えながらそう言ってや

る。

少しでも強気でいないとこのオーラに押しつぶされそうだった。

そう感じていると正面から声がかかった。

「それはお互い様でしょ、淡ちゃん」

それは咲の声だった。

その声に顔を向けると笑顔の咲がいた。

いや、笑顔は笑顔なのだが目が笑っていない。

それを見た瞬間、底知れぬ恐怖が体を貫いた気がした。

手を抜いていたのがバレたから？それ自体は問題じゃない。

隣の少女（天江衣）のオーラに怯えている？そうじゃない。

目の前に座る照の妹、宮永咲。その不気味な笑顔が恐ろしかった。

だが、やっていることは麻雀であって脅し合いなんかじゃない。

だから強気に出てこう返した。

「手抜きの私に負けてたのに、全力を出せば私に勝てるって言いたい訳？」

「やれば分かるけど…衣ちゃんがあれを試したいって言うし、そっちが先かな？」

要領を得ない返しをされ、少し呆然とした。

それを尻目に咲は

「それじゃあ、お願いできますか？」
と一言、隣りに座る金髪の女性に声をかけた。
◆　◆　◆
「あれ…ですわね？」
金髪の女性、龍門渕透華がそう答えると少し渋い顔をして言葉を続けた。
「あまり気乗りはしないんですけど…私も試してみたい気持ちはありますわね」
「ぜひ、見せてあげてください」
そう言って咲はこちらを見た。淡ではなく私に何かを見せたいということなのだろうか。

咲の言葉を受けて透華は一つ息を吐き、右手で髪を梳き、右目を隠した。
そうして少しすると、瞳は視点が定まっていないような虚ろな、それでいて透き通ったものへと代わり、
場の空気が重くなっていくのをひしひしと感じた。

何かが起こる。

淡もそれに気付いているようで引きつったままの顔が少し強張る。
私も何が起こるのかさっぱり分からない。こんなことなら照魔鏡を使っておくべきだったかもしれない。
ただ、これだけは分かる。

淡は負ける

◆　◆　◆

「…さて、透華さんの準備もできたようだし…始めようか」
そう咲が言って始まった二戦目。
目の前で様子が急変した相手を警戒しないほど、淡は馬鹿ではない。
とはいえ元は数合わせだと思われる相手。無意識にも評価を低く見てしまう。
（雰囲気がいきなり変わった…何をされるか分かったもんじゃないし、さっさと終わらせよう）

故に速攻戦術を取ろうとした。
そうして自分の配牌を確認し、絶句した。
（…聴牌（は）ってない!?）
いつも通りダブリーをするつもりだった。だが配牌は聴牌どころか3向聴はある。
（分からない。この人はそういう能力持ちってこと？じゃあなんで最初から使わないの？）
勝つためなら使えるものは使うべきであるし、ましてやそれが相手（わたし）への対抗能力（アンチスキル）なら積極的に使うべきだったはず。
いや、そもそも透華自体からはそんなに強そうな気配が無かった。
（私の能力が抑えられるレベルの能力者なら、私や照が気づかないはずがない…発動に条件がある？）
例えば右目を隠す行為自体がトリガーだったり、1局捨てる必要があったり…
何れにせよ自身の能力の及ばぬ現状に歯痒い思いをしていた。
「はい、淡ちゃん。それロン」
「…えっ」
考え事をしていたからと言うと言い訳のように聞こえるが、
あまりにも透華を警戒しすぎていて他が疎かになっていた。咲に振り込んでしまっ

た。

（敵味方を区別して対象を選べる…？だとしたら理不尽すぎない？）

もし狙った相手にだけ能力封鎖ができる能力だとしたら、私どころか照ですら勝てるか怪しい。

もはや咲や衣どころではない、一番警戒するべきなのは透華である。

そう、淡が勘違いしてしまうこともまた、魔王達の読み通りであったのだ。

◆　◆　◆

…衣と咲が初めて対局した時、目覚めた龍門渕の血。

一が「冷やし透華」と呼称し、その後に誰が言い出したのか「治水モード」と名付けられたそれは、

『対局者全員の能力の封鎖』＋『自身の処理能力の大幅向上（デジタル打ちの最効率化）』という化け物じみた能力であった。

しかし、発動条件が不明でかつ、発動後対局が長引けばほぼ確実に透華自身が倒れるといういつ現れるかわからない諸刃の剣のような能力でもあった。

故に、去年のインハイで冷やし透華にビビった他校が勝ち逃げをした時に咲は考え

た。

「任意のタイミングで短時間だけ発動できたら強いだろうなぁ…」と。

だから、出来るようにした。

今の透華は、『軽く息を吐き、右目を隠すことで、４局だけ治水モードに移行できる』のだ。

１日１回だけ、それも４局のみという制限こそあれど、任意に発動できる様になった治水モードに、

透華本人は当初「こんなの私の麻雀じゃありませんわー！絶対に使いませんわよ！」と言っていたものの、

咲や衣による「相手を序盤で完全に押さえつけた上で、後半大きく和了って完全勝利をすると目立って格好いい」という説得（せんのう）を行った結果、渋々ではあるが頼めば使ってくれるようにはなった。

そうして、「1日1回強制能力封印麻雀」が遊べるようになった魔王二人は、喜々としてその能力を上回るだけの力をつけようと『練習』をし始めたのだ。

その結果、無効化とは行かずともそれなりに抵抗できるようになった二人にとって冷やし透華との麻雀は「最新ＡＩを搭載した麻雀ソフトとの対局」みたいな状態になっている。

だが、それを知るのは龍門渕高校麻雀部のメンバーと咲のみ。

それを知らぬ淡と、それを後ろで見ていた照の心中は動揺と困惑で入り混じっていた。

対局終了

咲	３２０００	＋２
衣	２８０００	△２
淡	－２０００	△３２
透華	４２０００	＋３２

河がもたらすは平和な一時か、或いは。

7話　格差

結果を見たとき我が目を疑った。
後輩という贔屓目を差し引いても白糸台トップ5には確実に入るであろう淡が、何も出来ずに一方的に完全敗北を喫したのだ。
それも咲や衣の仕業ではなく、特別目立った能力者じゃないと思っていた龍門渕透華の力で。
（…そう言えば）
ここに来てようやく思い出した。
今年のインターハイ団体戦、その準決勝。彼女が同じような状況になっていたことを。
その対局後、彼女は張り詰めた糸が切れたかのように気絶したそうだ。
（あの時は能力が暴走しているような印象だったけど…これは違う）
明らかに意図的に能力を行使している。
だが、代わりに効果時間が短くなったように感じた。
（多分半荘ぐらいで効果が切れているのだと思う。それに気付いていれば…）

後半、淡はなされるがまま点棒をむしられ続けていた。
能力が使えなかったのではなく、使っても無駄だと諦めていたのだろう。
普段は諦めが悪い方だと思っていたが、これは仕方ないところもあるだろう。
…自分の信じていた力が、為す術もなく消し飛ばされたのだから。
そうして照は確信した。
来年のインハイ最大の壁、それは咲個人ではなく…
咲を含めた『龍門渕高校そのもの』であると。
同時に恐怖した。
力を挫き、心を折り、全てを根こそぎ奪っていく。
その為に仲間の力を使う。
咲がより狡猾に、そしてより強くなっているという事実に。
「おーい、淡ちゃん生きてるー？」
対局が終わり、意気消沈する淡に声をかける咲。
こうなった原因の一つだと言うのに反省の色は微塵もない。
当然だ。私が淡をボコボコにするように言ったからここまで叩き潰したのだ。
咲はそういう人間だ。
透華は、途中でこの対局の意図をなんとなく察していたようだが、

わざわざここまで痛めつけなくても良かったのではないか、と渋い顔をしている。
衣は試したいことが試せて満足しているようだ。
基本的に咲と思考回路の似ている衣もまた、淡を気遣うような素振りはない。
淡は何も言わずただ俯いたままだ。
「…淡」
俯いたままの彼女に肩を貸し、なんとか立ち上がらせる。
「えっと、淡ちゃん大丈夫かな?」
「咲」
「えっ、何?」
「来年のインハイ、楽しみにしてるから」
そう言い残し、私達は帰路へと就いた。

帰りの新幹線の中でも淡は落ち込んだままだった。
飲み物も口にせず、ただひたすら俯いたままであった。
だが、ここで凹んでいても何も動かない。

「淡」
「…何」
「淡は負けた」
「…分かってる」
「…私でも勝てないかもしれない」
「…だよね」
あんなものを見せつけられたのだ。
正直な所、自分に勝てる学生は妹だけだろうと思っていた私も大きなショックを受けている。
でも、それを認めて、そこから導き出される真実と向き合い、
淡を、自分を奮い起さなければならない。
「でも…」
「…？」
「あれが龍門渕高校の中堅」
「…副将じゃなくて？」
「今年は副将だった。でも、来年は咲もいる」

「…あれより強いの？」
その疑問は当然のもの。
淡は、いや、私も途中まではそう思っていた。いや、思い込まされていた。
「あの能力（ちから）は盤面を支配するタイプの能力」
「……！」
淡は頭が良くはないが察しが悪いわけではない。
ここまで言えば言わんとしていることは理解しているだろう。
一つ、『龍門渕透華の能力は自身の能力である程度の抵抗ができる』こと。
一つ、『自分たちでは抵抗できないその力に、咲と衣（あの二人）は抵抗出来る力を持つ』こと。
それはつまり、龍門渕透華という壁を隔てた、圧倒的な力の差を（間接的に）見せつけられたということ。
「…照？」
震えが止まらない。覚悟していたはずなのに。
何処かで咲のことを低く見積もっていたのかもしれない。
小学校・中学校と公式非公式問わず、大会には一切出なかった咲。
それと対照的に力を示すように、タイトルを取り続けていた自分。
いつしか高校生一万人の頂点などと呼ばれ、雑誌にすら乗るようになった。

だから『今なら咲にだって勝てる』などと夢見てしまっていたのだろうか。
震えが収まらない。まるで道化ではないか。
考えてみれば当たり前なのだ。自分だって強くなったのだ。
咲だって小さい頃より強くなっているに決まっているはずなのに。
自分は姉だから、妹の成長を喜ぶべきはずなのに。
その成長が、何よりも恐ろしかった。

「…照」
震えを押さえるように、淡の手が重なる。
手を伸ばされた方を見ると、淡が私の顔を覗き込んでいた。
「…ごめんなさい」
なぜ謝るのか。本来なら私が謝るべきなのに。
淡を倒してほしいと頼んだのは自分だ。言うなれば淡を落ち込ませた原因は自分なのに。
「淡のせいじゃない。全部私の…」
「そうじゃないよ、テル。…私のためだったんでしょ？」
…照以外の強い相手と戦わせて、普段の態度を改めさせる。

この小旅行にそういう意図が含まれていることに、薄々気付いていたそうだ。

…ますます自分が道化であるようだった。

「私、自分は一番強いと思ってた。地元の中学じゃ敵なしだったし、監督の知り合いのプロ?にも勝てたし…」

「でも白糸台でテルと出会って、一番じゃないって気付いた。」

「だけど、一番はテルで、自分は二番目だって、ずっと思ってた。」

「だから、テル以外と打つのに意味が無いと思ってた。ごめんなさい」

「…それは、帰ったら菫に言ってあげて」

「…うん」

「でも、テルも一番じゃなくて、一番は誰なのか分からなくて」

「だからテルはいつも強くなろうとしてたんだって、今やっと気づいて…」

「……」

「ええと、なんて言えばいいかな…と、とにかく!サキに勝つために一緒に頑張ろうって言いたかった!」

「…勝つつもりなの?」

「当然!サキに勝てばテルは間違いなくナンバーワン、でしょ?」

「…そうだね。今までだってそうなるべく練習してきた」

「私もこれからはサボったりしない！打倒龍門渕！」
「…うん、ありがとう。でも、二人だけじゃない」
「？」
「皆で、白糸台高校麻雀部一丸となって頑張って、倒すの」
「…！もちろん！」

…気がつけば、震えは止まっていた。

◆　◆　◆

「…帰っちゃったね、お姉ちゃんたち」
「来年のインハイが楽しみ、か」
「楽しみにされちゃ、何もしない訳にはいかないよね。透華さん、さっきの送っておいてくれますか？」
「別に構いませんが…いいんですの？」
「いいのいいの、そうでなきゃ面白くないもん、ね？」
「咲も愉悦の何たるかを心得ているよなぁ。今日は泊まりで打っていくか？」

「いいね～、この昂ぶりを発散したかったんだよね～。でも泊まりは無理かな」
「(・・ω・・)」
「衣ったら…」

8話　試練

時は進み冬の暮
年も明け冬休みが終わり、卒業までもう3ヶ月もないそんな時期。
それはいつも通りの日常に訪れた。

いつも通り授業が終わり、いつも通りハギヨシの迎えが来て、いつも通り龍門渕高校を訪れた咲。
強いて違いを挙げればいつにもまして賑やかであった。
「何かあったんですか？」
「ええ、今日は学校説明会ですわね。中学生の方々が来てますわ」
「あー、そう言えばうちの学校にもパンフレット来てましたね」
高校受験を2ヶ月後に控え、学校見学に訪れる中学三年生たち。
それを他人事のように眺める咲に、透華が声をかけた。
「そう言えば、咲さんはもう受験校決めてますの？」
すっかり忘れていたが、衣と出会う前は近くの清澄高校へ行く予定だった。

だが、咲にとって唯一と言ってもいい同性の友人のいる龍門渕高校もいいなぁとは思っていた。しかし、

「うーん、やっぱり清澄に行くと思います。家のこともあるので寮に入るわけにもいきませんし、ハギヨシさんに毎朝迎えに来てもらうわけにも行かないですしね」

衣から熱烈アプローチを受けてはいるが、父親と二人暮らしというのもあり家を離れる訳にはいかない。

咲としても苦渋の決断である。そして何より…

「やっぱりお嬢様校だけあってレベルも高いですし…」

そう、純粋に学力が足りないのだ。

以前衣たちが部室で定期テストの点数自慢大会をやっていたのを見たのだが、桁違いとまでは行かないがそれでもレベルの高い問題ばかりであった。

こう言っては何だが清澄に行く予定だったので受験勉強らしいことは何一つやっていなかった。

「なるほど…分かりましたわ」

納得の行く答えを得られたのか、透華はそれ以上詮索することはなかった。

そして、何やら用事があるようで、先に部室へ向かったようだ。

「さて、職員室行きますか」

いつも来ているので馴染んではいるが、結局のところ生徒ではないので、校内を歩き回るにも一応許可がいる。
私服校ではあるが、そのあたりの規律はきちんとしているのもまた、龍門渕高校の特徴なのだ。

そうして、いつも通り形だけの書類を書いて部室へ向かう。
扉を開けると部室の真ん中に雀卓が…無かった。

一瞬部屋を間違えたのかと思ったが、部屋の中には透華や衣を始め、麻雀部の面々が揃っていた。
雀卓の代わりに四角い大きなテーブルが置かれ、正面には衣が手を組みながら座っている。
普段とは違う明らかに異様な光景。普段豪気な咲もこれには思わず立ち止まった。
「え、何？どうかしたの…？」
「…来ましたわね」
「まあ、座れよ」
純に言われ、何も分からぬまま椅子に座る。

衣は何も言わない。
流石に何かが起こることは分かる。
「えっと…何が始まるんです？」
「咲、トーカから聞いたぞ」
「何を？」
「家が遠くて、勉強が足りないから龍門渕に入れないと」
「あー…そうだね」
「つまり、それがどうにかなれば龍門渕に入れるということだな？」
「うーん、そうなるのかな？」
もし何とかなるというのならば、当然入りたいものだ。
学力はなんとかなるかもだが、住む場所はどうしようもない。だからこその選択なのだ。
「トーカ」
衣が透華に一声掛けると、透華はため息を吐き、
「はぁ…分かりましたわ。住む場所についてはなんとかしますわ」
「えっ」
「寮に入れないのならばご両親と一緒に近くに引っ越せば解決ですわね？」

「えっ」
「これで片方は解決だな！さ、咲の受験に向けての勉強会を始めるぞ！」
「えっ」
　何が何だか分からない咲を他所に、一と智紀が本の束を咲の前に置いた。問題集だ。
「えっ」
「後二ヶ月、宮永さんならなんとかなります」
「いつも麻雀でボコられてるから、これで仕返しだな」
「偶にはボク達の気持ちを味わうのもいいと思うよ」
「えっ」
　思考が追いつかずフリーズしている。
　数秒経ってようやく理解が追いついた。
「いや、いやいやいやいや、流石にそれはまずいよ！」
「何がまずいのだ？」
「そこまでしてもらう訳にはいかないって！」
「なぜそう思う？衣たちのこと嫌い？」
「うっ…いやでもそれとこれとは…」
　正直な所現状週２～３程度の頻度でハギヨシさんに迎えに来てもらっているのすら

割りと気が引けているというのに、それ以上のことをされたときにはいろんなもので押しつぶされそうだ。

こういうところは小心者な咲なのだ。

あたふたする咲に透華が紅茶を差し出しながら、

「咲さん、これは私達からのお礼ですの」

「お礼？」

「ええ。見てくださいこの部室を。衣のために作った麻雀部でしたけど、最初はこんな賑やかではありませんでしたわ」

「衣はいつも自室に篭っていましたし、私達も屋敷にいましたから、この部屋はただ部屋の真ん中に雀卓があるだけの空き部屋同然でしたの」

「でも、あなたと出会って、衣は変わって、あなたや衣達と一緒にこの部屋で放課後を過ごすようになってから、この部屋は見違えるように変わりましたわ。最初の頃からは考えられないような大きな変化ですわ！」

「この変化を大切にしたい。この変化に感謝したい。そして、この変化がこれからも続いて欲しい。だからこそあなたには是非、龍門渕（うちゅう）に来てほしいんですの！」

「でも、お父さんのこともあるし…」

「咲さんのお父様には既にお話をしてありますわ」

「えっ」
「『咲が望むならば望むようにさせてあげたい』と仰っていましたわ」
「……」
「やはり気が引けますの？」
「そうですね…」
「咲」
　どうするか決めかねていると衣が口を開いた。
「衣はこれからも咲と一緒にここで麻雀がしたい」
　衣の瞳はまっすぐと力強くこちらを見つめている。
「ワガママなのは分かってはいるが、それでも…」
「ううん、大丈夫。衣ちゃん」
「それでは…？」
「いやはや、負けた負けた。龍門渕高校受けるよ」
　プライドの高い衣が頭を下げようとしてまで貫こうとするワガママ。
　これまでのお礼を込めてと言ってくれた透華。
　そこまでされては（元々行きたかったのも含めて）靡かざるをえない。
「でも、受かるかどうか分からないよ？」

「大丈夫、その為の勉強会だ！」
「えっと…麻雀は？」
「今日の分が終わったらだ！」
「そんなぁ～」

こうして、咲は龍門渕高校受験を決めた。
しかし、そこには受験勉強という試練が待ち受けていたのだ。
頑張れ咲！負けるな咲！
麻雀の強さは受験に関係ないぞ！

「あっ、新しい家とか諸々のお金とかは絶対返すから！」
「ふふふ、咲に返せるかな？」
「えっ」
「場合によっては龍門渕家のメイドとして雇うというのもありですわね？」
「えっ」
「その場合はオレ達からすれば二重の意味で後輩だな？」
「麻雀でこてんぱんにされた分を仕事で返すんだね？分かるとも！」
「えええええっ!?」

騒乱の始まり、長野編

9話　始点

濃い二ヶ月間だった。
ここまで勉強したのは初めてじゃないだろうか。
知恵熱なんてこの歳でもなるんだなって実感した。
だがその甲斐もあり、無事宮永咲は龍門渕高校に入学できたのだ。

入学式から少し経ち、部活動紹介や体験入部などが始まり、新しい学生生活に色めきたつ新入生と部員を確保するべく奔走する在校生達。
ちなみに麻雀部は部活動紹介も部員募集もしてなかった。
元々が衣のため強者（ともだち）を集める枠組みとしての存在でしかなかったので当然といえば当然なのだ。
なお咲は入学式当日には既に部員扱いになっていた。
つまりどういうことかと言うと、麻雀部は今までどおりなのだ。
そのはずだった。

「ですから、私達の部は部員募集してませんし…」

何時も通り部室に向かった咲が見かけたのは、2～3人の女生徒に囲まれてあたふたしている智紀であった。

「どうかしたんですか?」

声をかけた咲に何やら嫉妬のような感情を含んだ目を向ける女生徒達。

身に覚えがない状況にそれなりに困惑している。

「えっとですね…」

智紀が言うには自分たちは麻雀部に入りたかったのだが新入部員を募集していなかった。

それにもかかわらず同じ1年生の咲が麻雀部にいることに対して抗議をしに来たらしい。

咲は入学前から入部が決まっており、今年度は咲以外の部員を取る予定はないと説明してはいるが納得しないらしい。

「騒がしいですわね…」

部室の前で騒いでいることに気づき部屋から透華と衣が顔を出した。
「何事ですの？」
「実はまるまるしかしか」
「かくかくうまうまということだな？」
「そういうことであれば簡単な方法があるぞ！」
そういう衣はニコニコ顔であった。

「咲に勝てたら入部させてやるぞ！」

数分後、麻雀部の雀卓に倒れ込む三人の女生徒がそこにあった。

◆　◆　◆

倒れ込んだ女生徒は保健室に運んでおいた。
流れで同級生と対局することになった咲であるが、そもそもが疑問なので聞いてみた。

「なんで部員募集してないんですか？」
「それな、オレも疑問だったんだよ」
「全国出場する実力を持つ部ですからね。入りたい人は多いと思いますが」
どうやら純や智紀も理由を知らないらしい。
「お父様との約束ですの」
そう口を開いたのは透華であった。
「この麻雀部は衣のために作ったというお話はご存知ですよね？」
…要するに衣の力を恐れている透華の父親は、衣が交友関係を広げるのを快く思っていない。
麻雀部もあくまで衣のために透華が無理やり作ったもの。
その際に必要以上に部を拡張しない事を父親と約束しているのだそうだ。
「ですので衣が卒業すれば麻雀部は事実上消滅し、その後在校生が必要に応じて再度立ち上げるという予定でしたの」
話は理解できた。咲が入部しているのも特例なのでこれ以上透華が父親との約束を反故にするようなことになれば、最悪麻雀部の解体もありえる。
それは透華の願うところではない。
「他の生徒の皆さんに納得しろなどとは言えませんが、これが私が出来る精一杯ですの」

事が事だけに公には言えないですがと、透華は申し訳無さそうな表情をしていた。

龍門渕家の事情が垣間見えた一日であったが、それはそれとして麻雀部の活動の時間である。

今日は【来たるインターハイに向けて何をするか】の会議である。

「やっぱ特訓じゃねぇの？去年は俺たちの時間が取れなかったからやれなかったけど今年はやれるぜ？」

去年は麻雀部のために衣と透華以外の転校手続き・引っ越し作業などなどで、特訓らしいものは特になかったそうだ。

「特訓って言っても何するの？僕たちが強くなるためにたくさん麻雀するだけならいつもと変わらないよ？」

「それも大事ですけど、今年は他にもやることがありますわ？」

「ん？何かあったっけ？」

「分かりませんの？今年は咲さんがいるんですのよ」

「？」

「今年から部員が６人ですのよ。団体戦は５人チーム、あとは分かりますわね？」

「…そういうことか」

「合宿で行うのは個々人の能力の向上はもちろん、他校の研究、参加メンバーの選定などですわね。大まかな部分は咲さんにお願いすることになると思いますわ」

「任せてください。他校の傾向を調べて、その上で選べばいいんですよね？」

「うむ、咲に任せれば間違いないな！」

「流石に買いかぶり過ぎだよ衣ちゃん…」

龍門渕高校は前年度長野代表である。

衣という圧倒的戦力（有名人）が存在する以上確実に警戒されるし、衣の出番が来る前に試合を終わらせに来る可能性もある。

それを阻止するためには個々人の能力を上げるのが最も確実。

衣の去年の宣言…今年こそ全国優勝を目指すために龍門渕は一分の隙も見せない。

そこで咲は情報収集が得意な、中学時代唯一の友人に連絡をとった。

「もしもし京ちゃん？ちょっと頼み事があるんだけど…」

１０話　清澄

京太郎に連絡をした数日後、咲は何故か龍門渕高校ではなく清澄高校に来ていた。
なぜ清澄に来たのかというと、ひとえに京太郎への頼み事が関係している。

◆　◆　◆

「咲から連絡とは珍しいな。頼み事ってなんだ？」
「ちょっと去年と一昨年の麻雀のインターハイの牌譜と部員の情報を集めてほしいんだよねー」
「これまた珍しい頼みごとだな…咲って麻雀やってたんだな」
「京ちゃん知ってて言ってるでしょ？」
「ははは、悪い悪い」
京太郎とは長い付き合いである。
咲が麻雀好きであることも、中学で麻雀部を出禁になっていたことも知っている。
「で、頼まれてくれない？京ちゃんそういうの得意でしょ？」
「まぁ、別に構わないぞ。ちょうどうちの麻雀部のために資料集めてたし」
「え、京ちゃん麻雀やってたの？」

「最近始めたばかりだけどなー」
「言ってくれたら教えたのに」
「中学のときは興味なかったからな」
「そっかー」
「まあ、数日あれば資料まとめられると思うから、家に届けに行くわ」
「あ、ごめん京ちゃん。言い忘れてたんだけど引っ越ししたんだよね」
「え、マジで？じゃあどうすっか…」
「私が取りに行くよ。清澄高校だよね？」
「ああ、助かる。じゃあ資料まとまったら連絡するわ」
「お願いねー」

　というわけで京太郎の資料を受け取りに清澄高校へやってきたのだ。
　しばらく校門前で待っていると京太郎がやってきた。
「おっす咲。わざわざ来てもらって悪いな」
「気にしなくていいよ。それより…」
　資料を受け取りに来たのだが京太郎は手ぶらである。
「ああ、ちょっと訳あってな。悪いんだけど部室まで取りに来てもらえないか？」

「…まあ、頼んだのは私だから構わないけど、大丈夫なの？」
「大丈夫だろ。多分」
そう言って京太郎の案内によって旧校舎にあるという麻雀部部室へ向かった。
ちなみに後日、京太郎が龍門渕の制服を着た女子と旧校舎へ行ったという話が広まって京太郎が苦労することになるがそれは別な話。

清澄高校麻雀部。
透華の話によると去年は清澄高校は団体戦に出場していなかったらしい。
今年はどうなのかそれとなく京太郎に聞いてみたところ、女子団体はもしかしたら出るかもしれないと言っていた。
旧校舎の一室、麻雀部と書かれたプレートがあるその部屋へやってきた。
「お疲れ様でーす、この前言ってた中学の時のクラスメイト連れてきましたよー」
部屋に入ると旧校舎と言う割にはしっかりとした内装の部屋に雀卓一つ、本棚が幾つか置いてあり、何故か保健室にあるようなベッドも置いてある。
雀卓には何かを食べている小さい子とどこかで見覚えのある大きい胸の女生徒。
それとなぜか置いてある教員用の机に腰掛ける赤みがかった茶髪の女生徒。全員清澄の制服を着ているので部員で間違いないだろう。

京太郎の言葉に反応したように皆こちらを向いた。
そして茶髪の女生徒がこちらへやってきて、
「いらっしゃい。須賀君から話は聞いてるわ。ここで部長をしている竹井久よ」
「はじめまして。宮永咲です。　…ちなみにどんな話ですか？」
「中学のときに麻雀部を出禁になったって話ね」
「京ちゃああああああああああああああん！」

左頬が赤くなった京太郎をベッドに安置し、話を続ける。
「さて、宮永さんは須賀君の纏めた過去のインターハイの資料を貰いに来たのよね」
「はい、その通りです」
「まあ、約束したのは須賀君とはいえ、元々は私達が使うためのものだった訳だし、他校の生徒にはいどうぞと簡単には渡せないのは分かるわよね？」
「…つまり？」
「一局付き合って頂戴」
咲は表情にこそ出さないが、内心ほくそ笑んでいた。
◆　◆　◆
「いいんですか？他校との交流試合ってやっちゃダメなんじゃ…」

「今はインハイ期間中じゃないから大丈夫よ」
須賀君が連れてきた龍門渕の女生徒。宮永咲。
彼が言うには中学時代に麻雀部を出禁になったらしい。
目の前の彼女は粗暴な性格には見えない。出禁になるようなこととは一体何だったのかという興味。
そして去年の長野代表であった龍門渕の新入部員とはどれほどのものなのか。
竹井久は高校３年生だ。
高校生活最後の年に初めてのインハイ出場、不安がないわけではない。
とはいえ出るからには長野代表、ひいては全国優勝を狙いたいのは贅沢ではないだろう。
目の前の女生徒が龍門渕の主力だとは思わないが、それでも今の自分達の実力が昨年の代表校にどれぐらい通じるか知りたい。
故にこのような取引を持ちかけたのだ。
「構いませんが…まさかほしければ私達に勝ってみろーとかそういう話ですか？」
「いやいや、普通に一局してくれれば大丈夫よ」
「そういうことであれば…」
こうして咲と清澄高校麻雀部の小さな交流戦が始まった。

結果だけ見ると普通であった。
特異な打ち方をするわけでも、珍しい役を和了るわけでもなかった。
だが途中で目を覚ました須賀君が途中から対局を眺めていたのだが、何やら言いたげな表情であった。
対局後、咲は渡す用に纏めておいたファイルを受け取り、その後は特に何かするわけでもなく帰っていった。
その後須賀君に話を聞いたところ気になることを言っていた。
「なんか…隠し事をしているときみたいな表情してたんですよね」
◆　◆　◆
突然対局をすることになって少し焦ったが、もしかするとインハイで相手になるかもしれない相手、
しかも過去のデータの無い清澄高校の実力を量れるとなれば受けない理由はなかった。
かといって全力を出して相手に情報を渡すような真似はしないし、相手もそうだろ

う。というか部長に関しては明らかに実力を隠蔽していた。
多分こちらが力を見せていないのもバレているだろう。
それより気になったのは胸の大きな方の女生徒である。
途中で思い出したが確か全中覇者原村和のはずだ。
だが今日戦ってみた感想としては中途半端であった。
デジタル打ちなのは間違いないがそれにしては小さな穴が多い気がする。
それとは別に何かを秘めているような感じも受けた。
タコスを食べていた女の子のほうは分かりやすかった。
東場に強いが南場に弱い、速攻型の打ち手だ。

貰った資料を元に他校を推測する。
資料を眺めて思ったが、タコスの彼女のような速攻系の打ち手は先鋒として出てくることが多いらしい。
先鋒で得たアドバンテージを次鋒と中堅で守り、副将と大将の負担を減らすといった構成が多いようだ。
次鋒と中堅は防御力を重視するか、先鋒で得た相手のアドバンテージを崩すような打ち手が多く見受けられた。

つまり堅実な立ち回りをするか、あえて定石を外す立ち回りで相手のテンポを崩すような打ち手が多い。
そういった立ち回りで優位を得る、或いは他校との差を縮めた後、
最終的には副将と大将によって試合を畳む。そんな印象を受けた。
純粋な能力で言えば【大将〉先鋒〉副将〉中堅〉次鋒】の並びが鉄板のようだ。
とはいえエースが先鋒のパターンもそれなりにあるみたいだが…
（…さて、大雑把に考えたらオーダーはこんな感じだけど…あとは衣ちゃんと相談してからかな）
今の所の実力ではこんな感じ。
でも特訓の成果によっては変わるかもしれない。
特異な打ち手というのは何の拍子で目覚めるのか分からないから。

県予選まで、もう1月を切った。

１１話　選定

いつもの龍門渕高校麻雀部の部室。
何時もより何処か緊張感のある部員たち。
雀卓をどけて置かれた椅子に座りテーブルの上で手を組む衣と、その隣に立つ咲。
後ろにはホワイトボード。
そこには龍門渕高校の今年の選抜メンバーと、オーダーが書かれている。

「…なんというか、予想外だな」
ぼそりとそう呟く純。
「…一応、解説してくれますわよね？」
「もちろんです。ただ、先に断っておきますが、このオーダーは私の独断ではありません」
「うむ、どちらかと言うと衣のワガママのほうが強いかもしれないな」

ホワイトボードには黒いペンで、簡素に、ただ5人の名前が並んでいた。

先鋒　龍門渕透華
次鋒　井上純
中堅　国広一
副将　天江衣
大将　宮永咲

◆　◆　◆

咲は何処と無く重い空気を感じつつも、口を開いた。
「それでは、解説したいと思います。
まず、私達6人の純粋な実力…能力を加味した上での並びとしては、私と衣ちゃんがトントン、ついで透華さん、そして一さんと純さん、最後に智紀さんになります。
個々人の能力等によって評価したので、能力を持たない智紀さんは必然的にメンバーから外れてしまいました。ごめんなさい」
「いえ、私は気にしてませんから」

「続いてオーダー順ですが、先鋒にエースや速攻型の打ち手が来たときに、能力封鎖で失点を無くす或いは減らす事ができるので、透華さんを先鋒にしました」
「前半の東場ないし半荘は攻めてもいいかもですが、相手の能力次第では即封鎖も視野に入れるべきでしょう」
「次に次鋒と中堅。基本は防御重視ですが、可能であれば攻めていきましょう。二人の能力であれば応用が利くはずです」
「おうよ、任せておきな」
「いやー、まさか僕も透華たちみたいな能力者？になってるとは思わなかったなぁ」
「とはいえ一さんの能力はまだ発展途中なので、そこは特訓しましょうね？」

「最後に副将と大将なんですが…私としては能力との相性的に衣ちゃんが大将のままでいいと思ったんですけど…」
「そこから先は衣が説明しよう。まず、咲は全力の衣より強い。今までも打ってきた通りだな」
「相性が出てるだけだと思うけどね」
「次に時間だ。基本的に団体戦は朝から夜まで、１日で終わるんだが…どうも過去に大将戦だけ日を跨いで行った事があるらしい。

そういう可能性を考慮すると、衣の能力はひどく不安定だ。安定感のある咲のほうが大将にふさわしい

「そして何より…全国団体決勝の大将戦で、咲と照がぶつかるところを見てみたい！」

「個人戦でも見れるかもしれない。でもそれとは別に、二人が互いの高校の麻雀部を背負って、死力を尽くす様が見たいのだ！」

「お姉ちゃんにも楽しみにしてるって言われちゃったしね。今年の春季大会でもお姉ちゃんが大将だったから、多分大将で出てくるはず。唯一の懸念事項は淡ちゃんなんだけど…」

「あの実力で大将に出張ってこないだろう。あの能力はどちらかというと先鋒向けだ」

「…ということです」

「主な戦法としては先鋒戦はエース級の能力者相手なら能力封鎖で失点を抑える。そうでないならデジタル打ちの精度の高い透華さんなら負けません。

次鋒、中堅は基本的に防御。無論、攻めるところは攻めていきましょう。

去年の衣ちゃんの活躍を見ている他校は、衣ちゃんの出番までに試合を終わらせたいはず。その焦りを刈り取っていけば、点を守ること自体は難しくないはずです。

点数が残った状態で副将までもつれ込めば、後は衣ちゃんと私で全部消し飛ばして終

わりです」

◆　◆　◆

「…以上が大まかな龍門渕高校麻雀部の作戦と、オーダー内容になります。何か質問などがあればお願いします」
「咲が友達に譲ってもらったとかいう資料と、今までの練習を見て決めた結果なんだろう？俺は特に言うことねぇよ」
「そうですね、咲さんの分析力は麻雀部随一ですし」
「やっぱり頭いいよねー…春季テスト学年１０位以内だったんだって？」
「で、出来ればその話は掘り返さない方向で…」
「それで、今後の特訓はどう致しますの？」
「はい、今後も引き続き地力の強化、純さんと一さんの能力の強化、可能ならば拡張がメインになります。それと並行して他校の研究も進めていければとは思ってます」

「…もう２週間無いんだね」
「衣たちならば何の問題もない！」

「今年こそ全国優勝、だな」
「私も陰ながら応援します」
「勝つのも大事だけど楽しまなきゃだね」
「まずは地区大会、油断せずに行きますわよ！」
「「「おー！」」」